

〈国民史〉を適切に〈他者〉へ登記すること

フィンランド共和国が米合衆国「デラウェア河流域入植三百周年記念祭」へ招待される過程の意味について
鈴木俊弘

1 待ちこがれた祝典

一六三八年、バルト海から北海沿岸までのびる巨大帝国を形成していたスウェーデンは、特許状を付与した西インド会社の主導で北米大陸植民地事業を開始した。のちにオランダ王領、続いて英国の支配下に入り「ニュースウェーデン」と総称されたデラウェア河流域三州の基礎を築いた入植活動を讃える「三百周年記念」の祝祭は、一九三八年スウェーデン王国とフィンランド共和国から国賓を迎える連邦議会の議決に則って、米国はじめての連邦政府主催による「東海岸入植三百周年記念祭」として開催された。一九三八年六月二十九日、前日までデラウェア

ア州ウィルミントンで米大統領F・D・ローズヴェルトがホスト役を務めた主式典に引き続いて、デラウェア河対岸の小都市ペンシルヴェニア州チェスターでも、三千人以上の〈アメリカ人のフィン人〉(Amerikan suomalaiset) すなわちアメリカに定住したフィン系移民たちと共和国フィンランドから来訪したフィン人が参列する大規模な入植記念式典が開かれていた。片田舎チェスターは、かれらフィン人たちにとって式典会場以上の意味をもつ非常に神聖な場所であった。それはこの土地が一七世紀から、「フィンランド」と呼ばれていたという歴史的な事実が突如として「発見された」からである。ペンシルヴェニア

アの辺鄙に「フィンランド」という土地を記念するため、フィンランド共和国外務大臣ルドルフ・ホルステイは、二日前にロースヴェルトに黄金の記念メダルを手渡し、雨降りのなかを高らかに演説していた。

一七世紀の地図において、アメリカのもっとも古い時代、ヨーロッパ人たちがこの大陸にやってくるから一世代も経ていない時代の地名のなかにフィン語のそれをみてとれます。それら三百年ほど前の地図に、「フィンランド」という名称をお認めになるでしょう。わたしたちは、いにしえの開拓者たちがその心に自らの祖国を追憶する精神をもっていたのだということに身も震わんばかりの気持ちを抱きます。このことを心にお留めおき願いたいのですが、私たちフィン人の心に、同じ追憶の精神がいまも生きていて、数百年の時を経て、アメリカ合衆国とあなたを大統領にいだく人々への思慕の情を暖めつづけているのです。(傍点は引用者)

とはいえ舞台裏を明かせば、この一九三八年の祝祭以前に刊行されたニュースウェーデン関係の歴史書や研究書、あるいはフォークロアの類にいたるまで「フィンランド」という地名について語るものは一切見あたらなかった。(文字通りの例外と

して、スウェード系アメリカ人の歴史家で、ニュースウェーデン植民地史最大の権威アマンドゥス・ジョンソンは、一九一一年と一九二五年の著作のなかですでに、本文ではなく付録の概略地図上におおざっぱな表記を出典なしに示してはいたのだが。)

つまり、この一九三八年の祝祭は、言祝ぐべき「フィンランド」という対象が確かに〈アメリカの地〉にあったという「客観的な史実」どころか、その日のために周到に用意された「既成の事実」すら存在しない状態で敢行された奇異なイベントだったのだ。

しかしこうした事情は、〈国民史〉という親密なナラティヴの普遍的性格を探るうえで極上の手引きになってくれよう。六月二九日の大群衆の姿は、ある種の根源的な無関知こそ、われわれが歴史的な存在であることの実定条件に他ならないと雄弁に教えてくれている。〈国民史〉というフィクションは個別の史実や既成事実の紙束とそこに大伽藍を見いだす信奉者を交互に積み重ねた虚構フィクションなどではない。さらにこの創作物が現実の経験を構成する場と人びとの受容には、実のところ「客観的な史実」も「既成の事実」もまるで必要とされていないのだ。

2 舞台裏の事情

そのような空虚な内実を華やかな歴史の祝賀イベントに置き換え、三千人以上の〈アメリカのフィン人〉と共和国フィンランドのフィン人を片田舎の公園に集わせる魔法をかけたのは、たったひとりの〈アメリカのフィン人〉だった——その男、エミル・E・フルヤは、アメリカ史上はじめて選挙戦に統計処理による票読みの技法を持ち込み、F・D・ローズヴェルトの大統領選勝利に大きく貢献して「ワシントンの魔術師」と称された人物である²⁰。ミシガン州クリスタルフォールのフィン系移民二世として生まれたフルヤは、大学卒業後、アラスカの金鉱採掘に従事し、のちに新聞ジャーナリスト、ウォール街で金融アナリストとして経歴を積む。一九三二年から民主党全国委員の専務理事に就任すると、すぐさま選挙戦略に世論調査の統計処理技法を導入した。その効果は驚異的で、一九三二年の大統領選でフルヤの示した全米各地の投票予想はじつに九七%の正答率を誇り、当時の選挙管理運営を一変させることになった。フルヤが行った選挙戦の現代化によって、民主党は当落線上の立候補者がいる地域を的確に割り出し、選挙運動の重点化を指示できるようになったのだ²¹。

この魔術師エミル・E・フルヤは、チェスター祝祭の四年前、一九三三年の十一月ごろより、ペンシルヴァニア州歴史協会、連邦議会図書館など米植民地期史料を所蔵する緒組織に、「一

七世紀デラウェア河流域に『フィンランド』という地名が探し出せるか」との史料照会の依頼を行っている。その結果同年十二月十三日、連邦議会図書館の地誌部部长から、トマス・カンパニウス・ホルムの『ニューズウェーデン地域についての小記述』に、〈フィンランド〉の記載があるとの通知を受けた。

シャマシュング、またの名をフィンランド。この土地にはフィン人が住んでおり、堅牢な住居をこしらえているが、要塞ではない。クリスチャーナ要塞から水上を東へ二独哩進み、そののち陸路で二瑞典長哩を歩む²²。

フルヤは同部署から一八世紀初頭のアムステルダム地図製作者ニコラス・ヴィッシエルが製作した『ノウア・スウェキエ地理図』を借りうけ、アメリカ式マイル、ドイツ式マイル、古スウェーデン式マイルそれぞれの値換算表を書き付けたメモ用紙をスケール代わりにしながら、自分の手で古文書の記述を地図上に追跡していった。数ヶ月調査をつづけた結果、フルヤは、〈フィンランド〉という地名がペンシルヴァニア州チェスター市の郊外に位置するだろうと強く推測した。すぐさまチェスター市の土木部に調査を依頼し、自身も足を運んだ結果、一九三四年の夏ごろ、〈フィンランド〉と呼ばれていた地域が、クロ

「ザー公園の周辺に該当することを確信し、たったひとつの資料の、わずか三文の走り書きから「発見した」のだった^⑤。ただし、われわれはその発見に括弧を付け続けなければならぬ。文献学者、系譜学者のピーター・クライグは、一六九三年にニューヨーク植民地でおこなわれた各種統計史料を読みとくにあって、一七世紀の語用法がいかに現代のそれと異なるのかを次のように力説している。

一七世紀を通し、フィンランドはスウェーデン王国に自治的に統合された地域であった。従って、「スウェード人」という言葉は、フィンランド出身の人間もしくは第一言語をフィン語とする人間までも含むのである。「フィン人」という言葉は、一七世紀で使われたときには、第一言語がフィン語の人間という意味に限られた。事実には別した側面からいうと、デラウェアにやってきたすべての「フィン人」は、現在のスウェーデンにある複数の地域（基本的にはヴァルムランド）出身であり、すべてスウェーデン風の名前をもっていた。反対に現在のフィンランドからやってきていた植民者たちは、スウェーデン語を話し、フィン人とは見なされていなかった^⑥。

しかしこのような「発見」の裏事情など、当時のフィン人たちにとってまるで意味を持たなかったであろう。ニューヨーク州デラウェア河流域三百周年記念委員長であり、チェスター市式典執行委員長でもあった、エーロ・イェルフは、(アメリカの「フィン人」)に広く読まれていたマサチューセッツ州の芬英二言語新聞『開拓者』紙上に、この式典に臨む感無量の心持ちを存分に表現する。「チェスター市のクローザー公園で行われるアメリカ大陸最初のフィン人の永住入植三百周年の記念式典。われわれの人生において、これほど甘美でこれほど高潔な記憶をわれわれにもたらしてくれるものはありません。その地は、意義深くも、いまだ『フィンランド』の名を冠しているのです^⑦。

「フィン人の土地」という意味の「フィンランド」という言葉は、主体的立場にあるはずの(フィン人)、すなわち現実的なエスニシティとしてのフィン人、つまり「スオミ人」のもではなく、じつは八百年ものあいだ(フィンランド)の地勢を物理的・文化的に支配してきた歴代スウェーデン王朝とスウェーデン語の所産である。しかし、スオミ人は(国民史)の正統性を保つ必要があるために、本来「フィン人の土地」という呼称にあてられるべき「スオミ」に訂正はせず、あえて「フィンランド」を使用した。

フィンランド近代彫刻の第一人者であったヴァイノ・アールトネンの手によるチェスター祝祭の記念碑には、**NAILLA PAIKOIN OLI FINLAND NIEMIEN UUDISASUTUS/ TAMAN MANTEREN ENSIMAISTEN SUOMALAIS-UTEN/ STEN KOTIMAANSA MUISTOKSI NIMITTA-MANA** (此処ニフィンランドト名ヲ負ウ入殖地マリ/ スオミン民初メテ此大陸ニ渡リ/ 此処ニ故国ヲ偲ビテ呼ビタリ) と彫り込まれている。格調を重んじ正書法に基づいた変音記号のすべてを取り除いたフィン語の碑文に、**FINLAND** という言葉が溶けこまないように残され、異質さを逆手に歴史感を醸し出すように意図されている⁸⁰。

もともと発音体系に「F」という音節をもたないスオミ語を用いる(生粋の)スオミ人であれば、その「フィンランド」という言葉を正確に発音することすら労苦を伴ってしまうだろう。スウェード語や英語の知識による媒介的な発話を經由することではか指示できないはずの「フィンランド」という名称の土地を記念する(アメリカのフィン人)、つまり「アメリカに渡ったスオミ人」たちの姿が明らかにしてくれるのは、自分たちの所有する歴史として語られる(国民史)の中心には、当の国民にとってはどうにもならない異質性あるいは(他者性)が存しており、むしろこの(他者性)を經由することでしか自国民史

を語ることができないというジレンマなのである。

3 問題の所在

式典は滞りなく進められ、当日の主賓である合衆国連邦法務次官ロバート・ジャクソンは大聴衆をまえに誇らしげに演壇に立った。

三世紀前、あなたがたの国からやってきた者たちは、われわれのいま立っている土地をあがめ、かれらの祖国を記念して「フィンランド」という名を付けました。当時、フィンランドはスウェーデン王国とともにあったのですが、時の流れは、かれらのなした実績のほとんどを押し流し、この地域にかれらが与えた名前もまた、地図の上から消し去られてしまいました。植民者たちは、ながいこと固有の民族としての自覚を失って、われわれアメリカ国民の血液のなかに、他の者たちとともにとけ込んでいきました。われわれの血のなかにさまざまな貢献者たちの血が混じっているので、アメリカは世界中のほとんどの人びとと姻戚関係があると言っているように。(……) あなた方の国からやってきた者たちは、かくして単一の、他に比するものなき国民へ、連なる土台の血統のひとつとなりました。もちろん、アメリカの人々はあまりに

早くさまざまな要素からなる人々を受け入れてきましたので、あなた方の出身地の程度に匹敵するほど均質ではあり得ませんでした。しかしその利点はとれますと、われわれが今日手にしたものが、多くの国々からやってきた者たちの助けによってなされたということでしょう。アメリカの政治機構の土台となる社会は、マイノリティーたちが、モザイクのように集まってできています。そのなかに他の自由を脅かすほどの勢力をもつほどのグループはいません。さまざまな出自をもつこれらの人々は、この国が、決していかなる人種的、民族的、宗教的、もしくは政治的マイノリティーを抑圧したりはしないという、堅い信頼と不屈の信念をもって、ひとつに団結しています。アメリカのなかでマイノリティーを保護するというわれわれの信念は、アメリカ社会そのものの特筆すべき気質となっています。われわれは、宗教においても、民族においても、伝統においても、利益においても、思想においてもつけっして支配的なグループをもたない、ひとつの国民なのです。(傍点は引用者)

ジャクソンの演説は、おそらく当時の人々より現在のわれわれにとって心にしみる内容である。われわれがここで思い知らされるのは、この祝祭の地に本当に、「フィンランド」なる土地

があつたのかどうかなど、じつのところ問題の焦点にならないことを教えてくれるからである。ジャクソンが演台から飛ばしつづける泡沫は、フィンランドへの祝辞ではなく無邪気な「北米共和国の建国精神」の神話^⑤であり、その内容は当時の社会現実をあまりに無視している点で純粋なイデオロギーである。アメリカは混血であるが、「混血の混血」たる事實は断固として否定されている。それは厳密な意味での人種混淆の容認ではなく、「血統」という純粋性の意志に他ならない。ジャクソンの言葉はアンテペラム期から世紀転換期まで米国史に吹き荒れた北部型アングロサクソニズム^⑥の最晩年変形種であり、この時代にはすでに凡庸な紋切りと化していたが、その陳腐さゆえにその場に働く言説の支配力の強さを読みとることができらるう。

だが、われわれが改めて思い知らされるのは、ジャクソンの演説が美辞麗句で飾り立てられた安っぽいアメリカン・イデオロギーの発露にすぎないものの、まさにこのイデオロギーこそ辺鄙な広場に集まった〈アメリカのフィン人〉と共和国フィンランドの代表団が欲していたものに他ならなかった点である。アメリカン・フィンランド・デラウェア河流域三百周年記念委員会のジョン・サーリはこう告白している。

わたしたちフィン系アメリカ人にとって「……」この祝祭の意義は重要であります。すなわち「……」「フィン人は、イングランド人、オランダ人、スウェード人と並び、合衆国起源十三州の成立に貢献した国民のひとつなのだ」という歴史的事実が公式に認められたのです。「……」祝祭においてフィン系アメリカ人はつぎの事実を「アメリカ国民に刻みつける」絶好の機会をえることとなります。フィンランド国民は、つい最近合衆国に移民としてやってきたばかりではなく、その血はアメリカ合衆国のもっとも初期の歴史からアメリカ国民の血管のなかに流れているのだ、という事実を^②。

共和国フィンランドという二十年ばかりの記憶しか持ち得ない国家とその国民の「血統」は、アメリカという「他者」の凡庸な北部型アングロサクソニズムのイデオロギーを経由することでのみ、ひとつの明白な国民史の語りの形式を手に入れることに成功する。この語りの形式そのものを守るためには、積極的にも、消極的にも、それを支える安手のイデオロギーごと支えなくてはならない。ゆえにフィンランド外相ルドルフ・ホルステイは、ジャクソンにこう返答する。

フィンランドは、三百年前に苦心しながらデラウェア河の河

岸に広がる森林を切り開いていったフィン人の農民たちに対し最高の敬意をもって称えることを忘れはしません。わたしたちはフィン人が、アメリカ合衆国の偉大な民主主義の市民たちによって今日もお築き上げられている無数の礎石のひとつを敷き詰めたことについて、大いなる誇りを感じております。また他方で、アメリカの政治と社会生活の要石であるアメリカ合衆国の民主主義憲法は、二十年前に独立したわれわれの共和国に新しい民主的な憲法を制定するさい、われわれフィンランドのフィン人にとって、もっとも影響を受けた手本となり、最高に重要であるとされたのです^③。

しかし、ほんの二十年前に独立したばかりの国家とその国民の「血はアメリカ合衆国のもっとも初期の歴史からアメリカ国民の血管のなかに流れている」ことを、どのように、歴史のなかに証明しようとしたのであろうか。三百年前のスウェーデン王国によって着手された植民事業に、「フィン人」、(フィンランド)的な要素をいかに分離して措定し、フィン人みずからの視点でニュースウェーデン植民地の物語を再構成するののかという努力は、一九一七年に独立を果たしたばかりの若き共和国フィンランドからではなく、一九世紀にアメリカ合衆国に移民していったフィン系移民たち、つまり「アメリカのフィン人」の要

求によって模索されはじめた。そして、やはり舞台は古文書や資料のなかにはなく、政治の場であり、しかも「アメリカ民主主義」の最高機関であった。

4 政治運動

〈アメリカのフィン人〉として、もっとも早い時期にデラウェア河の入植事業についての著作を残しているのは、一八九一年にロシア帝国内のフィンランド大公国に生まれ、二十歳でアメリカへ移住したサロモン・イルモネンである。彼はニューヨークで主に移民問題を取り扱う芬語新聞『移民』や出版物の編集者としてキャリアを積んだのち、ミシガン州の「スオミ神学学校」にてルター派神学を学んでいる。聖職者の資格を取得してからは、説教巡回および飲酒抑制運動に力を注ぐ、信仰心篤く熱心な指導者として、〈アメリカのフィン人〉たちの信望を一手に集めた異色の経歴を持つ人物であった⁵⁾。イルモネンがニュースウェーデン入植事業について記した『アメリカにおける最初のフィン人』は、一九一六年に出版されている。この著作は、その内容の大部分を、すでに先行出版されていたスウェーデン系アメリカ人の研究書、とくにアマンドゥス・ジョンソンの著作に負ったものであったが、イルモネンはこれ以後、フィン語にてデラウェア植民地に関する著作を精力的に出版し、ヘア

メリカのフィン人〉を代表する歴史家としての名声までも得ることになった。アメリカ合衆国に生活するフィン人たちの起源を探り、かれらの祖先へ至る系譜を、一九世紀半ばの移民熱の時代ではなく、ひと飛びで一七世紀の植民地時代のさなかに求めようとする数々の著作は、〈アメリカのフィン人〉のアイデンティティ形成に大きな影響を及ぼした。イルモネンのもとに集った有力者たちは独自の歴史協会を組織し、スウェーデン系アメリカ人と同様にフィン人のアメリカ大陸上陸三百周年記念を記念する祝祭を計画していった。

一九三六年六月五日、第七四期米連邦議会において公的決議第一〇二号「アメリカ合衆国政府と合衆国民のデラウェア河流域における最初の永住入植三百周年記念式典その他に、スウェーデン政府及びその賓客の参加を招待する決議案」（下院合同決議第四九九号）が採択された⁶⁾。

この合同決議四九九号は、アメリカ合衆国大統領にたいし、アメリカ合衆国政府と合衆国民のデラウェア河流域における最初の永住入植三百周年記念式典その他において、スウェーデン政府及びその賓客の参加を招待するよう承認し、要請するものである。

デラウェア州ウィルミントン、ペンシルヴェニア州フィラ

デルフィア及び、その他の州のいくつかの地において、一八三八年中にデラウェア河流域における最初の永住入植三百周年記念式典、すなわち、今日のデラウェア州、ペンシルヴェニア州、ニュージャージー州を包含する、いわゆるニュー・スウェーデン植民地の最初の永住入植三百周年記念式典が開催される予定である。(……)

合衆国会議上院及び下院は、当合同決議により、この行為をなすに適切であると合衆国大統領が意向する時期に、合衆国大統領が、スウェーデン政府及び、デラウェア州、ペンシルヴェニア州、ニュージャージー州で開催されるスウェーデン人の永住入植記念式典に際して、これにふさわしいと合衆国大統領が認める賓客を招待することを承認し、要請する。

カールロ・クーサモ、ジョン・H・ウォリネン、ペンツェイ・オッリ、ジョン・サーリ、ユルヨ・シェーブロムといった米国内で非常に高い社会的地位を得た移民二世たち、のちの「アメリカフィンランド・デラウェア三百周年記念祭委員会」の中核を組織していく顔ぶれがつどい、ニューヨークを活動拠点に祝典の計画を公表したのは、このスウェーデン王国のみを来賓国と定める両院決議第四九九号発表後の一九三六年九月二十九日であった。興味深いことには、かれらは当初、祝祭の遂行

年をスウェーデン王国第三回植民団が到着した一六四一年より三百年後の一九四一年と定めていたことである¹⁶⁾。すなわち当初かれらは、デラウェア入植事業の初期の記録のなかに「ハン人」の姿を見いだせなかったのだ¹⁷⁾。

しかしながら、一方で来る一九三八年にスウェーデン王国の王族を公式招待して開催されることとなったデラウェア河三百周年記念祭に、若き共和国フィンランドの参加を求め、両院決議第四九九号の修正を働きかける水面下の政治運動は着実に進められていった。のちの「アメリカフィンランド・デラウェア河流域三百周年記念祭委員会」の委員長オスカー・ラーソンは、ミネソタ州第六八期合衆国下院議員としての経歴を持ち、事務局長のジョン・H・ウォリネンは、コロンビア大学の準教授として政治運動に学問的な裏打ちをするための執筆活動に勤しんでいた。もっとも大きな功績をなしていたと考えられるのは、エミル・E・フルヤである。前述のとおりローズヴェルト大統領の選挙参謀として与党民主党の中核に席をもち、政治的な操作を行うにこれ以上望めないくらい有利な立場にあったフルヤは、ペンシルヴァニア州選出の民主党下院議員ロバート・G・アレンと、ミシガン州選出の民主党下院議員フランク・ユージーン・フックと親密な関係を築くことに成功し、ふたたび中心として修正決議案の提出にこぎ着けたのであった¹⁸⁾。興味

深いことに、フィン人たちは「アメリカとスウェーデン」という関係枠を壊そうとしていたわけではない。むしろ二者の関係を強固に設定した上で、もう一角にフィンランドの要素を打ち込み、三者の関係を正三角形にしようとしていたのだ。ジョン・サリーは両院決議第四九九号への修正決議の動議提出の直前にフルヤに宛てた手紙にこのように文をしたためている。

もしフィンランドが祝祭に参加するよう招待されるのなら、われわれアメリカのフィン人たちも、また、一九三八年に記念行事を行うべきでしょう。なぜなら、一九三八年の祝祭は真に（アメリカ）国民の祝賀となるであろうからです。この祝祭は、デラウェア地域での最初の永住入植に対する、三百周年記念祭であって、決してスウェード人もしくはフィン人の上陸を記念するものではないからです。もしフィンランド政府が招待されるのなら、フィンランドとフィン人は、スウェーデンとスウェード人とひとしく、入植という功績に対する榮譽と祝賀にあずかることができるでしょう。ゆえに、フィン人とフィンランドは公的にも、歴史的にも、そして法的にも、デラウェアの植民活動に際しスウェード人とスウェーデンと肩を並べて認識されることになりましょう¹⁹。

5 舞台は議會へ

一九三七年七月二九日、ロバート・G・アレンは第七五期米連邦議會公的決議第七一号（両院決議第一三五号）の添付報告となる「デラウェア河流域における最初の永住入植者についての覚え書き」を議会上院に提出している。

一九三六年六月五日採択の公的決議の修正決議案、すなわち「アメリカ合衆国政府と合衆国国民のデラウェア河流域における最初の永住入植三百周年記念式典その他において、スウェーデン政府及びその賓客の参加を招待する決議案に対する追加を決議し、大統領に要請する修正決議案」に関する外交委員会は、同修正案を検討の結果、以下の報告書に基づき認可を推奨するものとする。

委員会は、デラウェア河流域における最初の永住入植三百周年記念式典にフィンランド政府を参加のために招待を追加する案を決議するものとする。なぜならば、入植が行われた当時、フィンランドはスウェーデンの一部だったからである。この見解に基づき、一九三六年六月五日の公的決議への修正はまったく適当であると考えられる²⁰。（傍点は引用者）

この「フィンランドはスウェーデンの一部だった」という文

句は、以後すべての議論の中核をなすキー・フレーズとなる。アレンが「フィンランドはスウェーデンの一部だった」と述べるとき、そこには二〇世紀初頭の眺望点に立って望遠鏡を覗くように解釈された一七世紀の世界が展開していた。アレンは、ニュースウェーデン植民地史を以下のように解説する。

〔本報告の典拠となる〕アマンドゥス・ジョンソン博士の著作はデラウェア河流域の最初の入植を扱った本としては唯一包括的なものである。ジョンソン博士は、スウェーデン系アメリカ人であり、デラウェア植民地三百周年記念の一九三八年祝祭の準備において指導的な役割を担っている。著者及び彼の作品は、主題を歴史的にもっとも信頼の置ける史料から取り扱う態度で臨んでおり、ゆえに問題の解答を導く資料として依拠しうるにふさわしいものである。〔……〕

この問題についてジョンソン博士の著作をひもとく前に、いくつかの点についてスウェーデンとフィンランドとの基本的な事実確認を指摘するのが肝要であろう。

一一五〇年から一三〇〇年のあいだに、フィンランドはスウェーデン王国の一部となった。一三五〇年頃までに、フィンランドは王国内の自治地域になったといわれている。以降、一八〇八年から一八〇九年にロシアがフィンランドを征服す

るまで、フィンランドはスウェーデンの東半分を構成しており、繰り返すが、単なる一地方ではなく、領土内におけるひとつの自治的な区分であった。フィンランドの住民は、平等な権利に基づき、政治その他において、王国の他の地域と同様に、文字通り「スウェーデン王国のれっきとした臣民」(native Swedes)として、臣民身分制議会への参加、国家もしくは教会の役職・地位への任命資格を持っていた。一八〇九年のロシア征服までのほぼ六百年間にわたり、スウェーデンとフィンランドにおける法・司法管理・行政組織・教育・信仰は、王国内の二地域が等しく恩恵を受けるようなかたちで制度化されていた。

以上のような事実は、ニュースウェーデン植民地に関連するスウェーデンの一七世紀の状況を議論する際に是非とも心に留めておかなければならない^①。

アレンの語り口、それは〈アメリカのフィン人〉の狡猾な戦略に沿ったものであった。彼の提示する歴史的根拠、世界解釈の下地はニュースウェーデン研究の分野で「歴史的にもっとも信頼の置ける」と評されていたジョンソンの著作、あくまで「スウェード人側」視点で展開される歴史記述に完全に依拠していた。〈アメリカのフィン人〉は、闇雲に独自の歴史の物語

を振りかざしたのではなく、他者の物語を「プリコラージュ」した——つまり、古きスウェーデン王朝の歴史なかに、若き国民国家たる共和国「フィンランド」の姿を史実そのものに一切手を加えることなく、浮かび上がらせたのだ。スウェーデン側の依拠する歴史記述をそっくりそのまま援用したことにより、祝祭にスウェーデン代表団を招待する「条件」は、共和国フィンランドを招待する「根拠」へすり替えられた。さらにニュースウェーデン植民地においては、「はたして幾人の入植者がスウェーデン人で、幾人がフィン人であると分類できるのか」という問題については、完全で満足のいくような回答を出すことはできない⁽²⁾と前置きしながら、

フィン人の要素を特に強調するような意向で出版されたわけではないような、ニュースウェーデン植民地における第一人者の著作に依拠した、これまでの概観をもってしても、以下のような結論が導き出せることであろう。

(1) ニュースウェーデン植民地におけるフィン人のもつ役割は重要なものであった。フィン人の全人口における割合は、三分の一、おそらくはそれ以上を占めていたと考えられる。

(2) 合衆国政府が、一九三八年に執り行う祝祭を、デラウェア河流域における最初の永住入植の三百周年記念祭と認識

する限りにおいて、合衆国政府は式典実行に際し、スウェーデンとスウェーデン人のみならず、フィンランドとフィン人も含めるべきである⁽³⁾。

と結論を出し、連邦議会へ「両院決議第一三五号」の承認を請願したのである。これよりさき議会は、一七世紀当時の世界には問われることすらなかった「一七世紀北米植民地でのスウェーデンとフィン人との分別」作業に従事することとなる——フィン人たちはこの時点ですでに完全勝利していた。

同年八月二一日、連邦議会下院において、修正案の承認を行うかどうかの是非を問う討議が開始された。まずテネシー州選出のサミュエル・D・マクレイノズが、一声をあげ、「アメリカ合衆国政府と合衆国国民のデラウェア河流域における最初の永住入植三百周年記念式典その他において、スウェーデン政府及びその賓客の参加を招待する決議案」の修正を議題にあげると、下院議会上級官が件案を読み上げはじめた。マクレイノズは二〇分間の答弁時間を議長に要求した。その要求が議場の満場一致により受け入れられると、発言権をロバート・G・アレンに発言を譲った。アレンはさっそく、この修正案がデラウェア河流域三百周年記念祭にフィンランドを招待する目的以外にないことを強調し、他にいかなる腹心も、すでに決定されて

いた予算の増額要求もないことを議場にアピールした。そして自分の発言が歴史の背景にふれることにスウェード系アメリカ人の反発²⁾があるのを示唆しながら、以下のように発言した。

フィンランドは、この植民活動の当時、スウェーデン内の自治領でした。行政という面に関する限り、フィンランドとスウェーデンは単一で、同じもので、この地にやってきた入植者たちの大部分はフィンランドの人々で構成されていました。

(「……」この地にやってきた船団の提督の一人はフィン人のクラウス・フレミング提督でありまして、しかも船団の一隻に乗船した一〇五人のうち九二人までもがフィン人でした。

それは、一六五六年三月の派遣船団において、です。総人数のうち九二人までもがフィン人であったこともあるのならば、この小さなスウェーデンの植民地のなかで少なくとも三分の一は、フィン人もしくはフィン人の血を引いていると考えても良いのではないかと思われま³⁾す。(傍点は引用者)

こののち、アレンは他の議員から、招待のための背景についていくつかの基本的な質問を受け、これに答えているうちに手持ちの二十分を使い切ってしまう。議長の小槌が振り下ろされたあと、二分間だけ時間の延長を申し出、アレンはふた

たび議場に問いかけた。

(「……」われわれのしていることは、社交会を開くことだし、といえるかもしれません。すでにスウェーデンを招待しましたし、彼らは招待されてしかるべきでしょう。いまわれわれが欲していることは、同じ招待状をフィンランドにも送りたいということなのです。もうすでに、この祝祭に関係する三つの州のうち二つまでもが、フィンランドをこの祝祭に含めるという要請を済ませています。これは、まったく自己の利益のみを考えた党派的な考えからくるものではありません。これは、いかなる点においてもスウェーデンの栄光を損なおうとするものではありません。これはただただ、フィンランドにたいしてわずかばかりの注意を差し向けることなのです。議長、この法案が議決にかけられることで、この小国の国民にたいし、彼らが過去に行ったことと、彼らが現在行っていることへ、友好的で善意に満ちた心を有するすべての議員の方々の手助けになることを、私は心より望んでおります。

(拍手)⁴⁾(傍点は引用者)

アレンは、フィンランドという国家の存在が歴史のなかで実定性を有している点について異議の挙手なしと宣言するよう

に、議論の焦点をアメリカという国家の温情にすり替えたのである。彼の「殺し文句」に、議場からは割れんばかりの拍手がわき起こったが、そもそも一七世紀には共和国フィンランドのみならず当のアメリカという国家自体も世界の想像の枠外であったことを指摘する者は誰もいなかった。

アレンが議員席に戻った後、議長リンゼイ・C・ウォレンは、マサチューセッツ州選出のジョゼフ・W・マーティンに答弁のため二〇分の時間を与えた。そのうちの三分を同じくスウェーデン出自でマサチューセッツ州選出のペール・G・ホルムズに与え、ホルムズが壇上で演説をはじめた。

私は、この三百周年記念祭に小国フィンランドを招待しようと考えている、ペンシルヴァニア州の議員諸氏と争いをやろうという意志はまったくございません。個人的には、私は、小国フィンランドにたいし、非常な敬意を抱いております。しかしながら、少しばかり込み入った事情があるのです。

「込み入った事情」として彼があげるのは、一九三六年に公式招待が決定した時点で、すでにスウェーデン政府と国民が多額の予算を割き、デラウェア州ウィルミントン市の記念碑建設をはじめとして、数々の祝典の計画を実行しており、今更ながら

フィンランド政府と、(アメリカのフィン人)にスウェーデンの祝典を分け与えることはできないという説明であった。そしてホルムズは、フィンランド政府が祝祭に参加するための「資格」に疑問を投げかけた。だが、すでに議題は「資格」でしかなかった。

私は、確かにこの栄光ある国の、すばらしい国民の代表団を招待したいという希望とぶつかろうとは考えておりません。

しかし、私はこの段階になってフィンランドを、もともと祝祭に招待されるはずだったスウェーデン政府と同格に扱うような議決を採択するのは、スウェーデン政府にたいし道理ある態度だとは思えないのです。三百年前、フィンランドはスウェーデンの「地方」だったのであり、このふたつの国はひとつの旗、すなわちスウェーデンの旗の下にあったのです。植民団は、スウェーデン政府と交易会社によって出資されていたのであり、植民のための土地も、スウェーデン政府の名のもとで購入されたのです。(傍点は引用者)

ここで共和国フィンランドを祝祭に参加させようとする陣営と、それを拒もうとしている陣営、その両者の繰り出す言語が、すでにまったく同じものになってしまった事実気づかされる。

「フィンランドはスウェーデンの一部だった」という共通の視点が一七世紀の歴史を解釈する基調となり、賛成側・反対側のいずれもが「フィンランド」が国民的な存在であることの一点だけは手を取り合う。ゆえに問題の差異は〈血統〉の問題に移行する。フィンランドの支持者は、スウェーデン王朝のなかに複数の国民の〈嫡子〉資格を読みとるのに対し、スウェーデンの支持者は、現在の国民国家スウェーデンのみが〈嫡子〉で、他は〈庶子〉の扱いを求めるのだ。

【アレク】ホルムズ氏は、フィンランド政府の祝祭参加の意向を理解しないことは、重大な誤りであると本当にお考えにならないのでしょうか。フィンランド政府は、この祝祭に参加しようという意思をすでに表明しています。なぜなら、フィンランドは植民事業の時代にスウェーデンの一部だったからです。

【ホルムズ】私は、フィンランド政府からそのような意思表明があったことは存じ上げません。フィン系アメリカ人のなかには、祝祭に参加しようと躍起になっている者たちがいますが、政府自体に関しては、そのような表明があったことは存じません。

【アレク】フィン人が、植民地活動のなかで果たした役割は、

非常に大きなものでした。それゆえ、彼らが祝祭参加に関心を抱くのは当然ではありませんでしょうか。

【ホルムズ】まったくその通りです。確かにきわめて多くのフィン人が、後々の植民団に参加していたと記録されています。しかし私が述べたいのは、この植民団には、数多くの他国民も参加していたのだ、ということですよ。

フィンランドがデラウェア河流域三百周年記念祭へ参加するか否かについては、アメリカ合衆国内のみならず、スウェーデンにおいても政治問題として議題にのぼっていた。駐米スウェーデン大使ヴォルマル・F・ポストロームは、「もしフィンランド、結局は当時エストニアやラトヴィアやその他の地域と等しくスウェーデンの一地域でしかなかったフィンランドが、この純粹にスウェーデンの植民活動への記念祭に招かれるということが現実になるのなら、われわれはまったく驚きの念を隠せません。当時フィンランドが参加していたとしても、この植民活動は、まったくもってスウェーデンの王権のもとに成し遂げられたものであります」と公言していた²⁹。彼の述べる「王権」とは、現在の「スウェーデンの主権」をふまえたものである。フィンランドを国家単位として招待するということは、スウェーデンという一七世紀王朝の、歴史的な境界、歴史的な

主権が、その名前を現在に負うスウェーデンという国民国家へ完全には移行されてはいないのだということ、国際的なイベントとなった「デラウエア河流域三百周年記念祭」にて明らかにしてしまうこととなる。このことは、スウェーデンにとって「歴史の断絶」以外の何ものでもない。

またスウェーデン政府も、フィンランドが国家として参加することにかなり強い反発をおこし、公式な不快感を臆さずに表明していた。「ニュースウェーデンの記念祭に関する遂行委員会の検討グループにおいて、われわれはすでにフィンランドの問題を討議検討してきた。そして、全会一致でデラウエア河流域の記念祭にて代表されるべきは、今日のスウェーデンでなければならぬとの結論に達した。当時のスウェーデンは、ブレイキング、スコーネ、ハッランド、そしてポーフスレンの各地域を王国領に含んでいなかったが、今日これら南西地域はスウェーデンの要であり、じつのところ、祝祭に参加する多くの議員が、首相を含めてスコーネ出身であるのだ^⑧」。

一七世紀スウェーデン王国は、王国史上最大の版図を形成した時期であったのだが、必ずしも現在の国民国家としてのスウェーデンをうまい具合に包括してはいなかった。フィンランドの参加を容認する論理は、スウェーデンの国民的統一を否定する論理でもあったのだ。そこでかれらは逆に、フィンランド側

にこのように切り出した。「もし、フィンランドの参加を容認するのであったら、バルト諸国も祝祭に参加させなければならなくなる^⑨」しかしエミル・E・フルヤは、このようなスウェーデン側の「挑発」をローズヴェルト大統領宛の請願書のなかで毅然としてはねのけている。

入植が行われた当時は、フィンランドは実はスウェーデン内の大公国にすぎなかったのだと指摘する人もいます。しかし、それぞれを別であると認めるに十分な先例があります。ドイツにおいて、一九三二年にリュッツェンの会戦三百周年記念祭が開催されたとき、スウェーデン政府とフィンランド政府とは、公式にそして個別に出席しています。一六三二年当時、フィンランドは、一六三八年と同じくスウェーデン内の大公国であったにもかかわらず、です^⑩。

6 決着の〈論理〉

しかし、アレンとホルムズの舌戦は、一七世紀の歴史の混沌からスウェーデンとフィンランドを「どのように明確に区別しうるのか」という、ある意味不毛な議論からではなく、「現在の米国民が、ふたつの国家をどう見ているのか」という身も蓋もない感情論で決着することになった。サミュエル・D・マク

レイノズが、フランク・ユージーン・フックに三分間の時間を割き、彼を壇上にあがせると、まず彼は、アレンの論点を引き継いでこのようにフィンランドを擁護した。

議長！ 一三五〇年頃よりフィンランドはスウェーデン王国の構成に欠かれない地域 (integral part) でありまして、それから一八〇九年にフィンランドはロシアに占領され、のちに独立国家となりました。植民地建設の時分には、多くのフィン人がスウェーデン人とともに、デラウエア河流域に入植するためにやってきたのです。すべての時代においてフィン人たちは、完全に別の民族 (separate nationality) として扱われてきました。かれらは自分自身にたいして忠実であり、みずかららの民主主義をうち立てるまで戦い通しました。そしていまや彼らは、世界中の先進国民より寵愛され尊敬される国民となったのです。^④ (傍点は引用者)

このようにフックはフィンランドをスウェーデン王朝の歴史のなかで「integralだがseparate」な要素であるがゆえに、当然のように祝祭への参加資格を有し、しかも「個別の」参加資格を有すると印象づけた。そして畳みかけるように「integral」という言葉の意味の二重性を駆使し、議場の議員たちに、

「アメリカの国益を守った誠実な友人としてのフィンランド」という当時米国内でもはやされた美談をもちだす。

歴史を通じて、フィン人はみずからの自治権 (integrity) を守り通しました。そして、今日、世界にたいしても、合衆国にたいしても誠実さ (integrity) を守り通しました。(拍手) フィンランドはその負債を合衆国に返済した唯一の国民です。(拍手) この事実のみを考慮に入れても、彼らにはこの祝祭に参加する資格があるのではないでしょうか。^⑤ (傍点は引用者)

一九三〇年代の米国メディアにおいて、「フィンランド」といえば、すぐさま「合衆国の『戦争負債』を誠実に払いつづけた唯一の国」という肩書きが添えられるほど、若き共和国フィンランドは米国民に惜しみなく賞賛された国家であった。^⑥ 第一次世界大戦末期から戦後の混乱期に至るころ、欧州全体の穀物供給が慢性的に不足状態に陥ると、欧州各国は、アメリカに多量の穀物供給を申し入れていた。フィンランドも例外ではなく、ロシア革命の余波を受けた社会混乱と独立劇、革命に続くとうとする赤衛軍と反革命対策に必死な白衛軍との大規模な内戦、さらにロシアからの穀物提供が停止された影響から、国内経済

は一時的に疲弊した。そのため一九一八年から一九二〇年までの「国家の危機」の時期に、アメリカに計十七万トン以上の穀物および食料品の輸入を申し出たのであった。その対価として二四二九万ドルを支払うことで契約し、そのうち一六〇〇万ドルをフィンランド産の木材加工品の輸出でまかない、のこり八二九万ドルを利子付き債務として返済することで合意した。

英・仏・ベルギーなど連合国向けの「軍需物資」購入に充てられた債務とは異なり、フィンランドの場合は、厳密には「戦争負債」と呼べない性格の負債であった。しかし当時は、第一次世界大戦中に支出された債権を、おしなべて慣習的に「戦争負債」と呼んでおり、フィンランドの債権の場合も米国民からは「戦争負債」と見なされていたのだ³⁷。

一九二二年二月、合衆国の大戦時対外債務委員会は、欧州各国共通の返済計画案を提示、フィンランドの返済方法も二五年、四・二五%の利息と設定された。その後、欧州がかつてないほどの不況に見舞われ、各国が軒並み合衆国にたいし返済計画の場当たり的な変更、返済期限の延長通知、正貨ではなく代貨による返済、はては利息・元金返済の不履行を繰り返すなか、フィンランドだけは着々と返済をつづけ、アメリカ国民に驚異の眼差しを注がれたのである。

「暗黒の木曜日」が、翌年以降ヨーロッパの各地に飛び火し、

欧州債務国の事実上の返済不履行が明白になった一九三〇年代初頭、合衆国は「モラトリアム」、利息帳消し、元金引き下げなどの数々の経済的特別処置を債務国に適用したが、これは国内で不況に苦しむ国民からは「国家財産の放棄」と見なされていた。政府の対外譲歩的な経済政策に対する「報復法案」の意味合いをこめ、連邦議会両院の全会一致で可決された、いわゆる「一九三四年のジョンソン法」の時代になると、世論は政府の対外経済政策をほとんど失策と受け止めるようになっていた。ちょうどその時期、ただの一度の返済延滞もなく十二年間債務を国庫に振り込みつづけてきたフィンランド共和国は、アメリカ国民にとって、注目のまをこえて、「英雄的な友人」「正義をなす国民」という寵児となっていたのである³⁸。

「アメリカ合衆国を自分たちの故郷として移り住んだ開拓者の息子や娘たちは、われわれの決議を心から歓迎するでしょう。なぜならば、彼らは自分たちの体に流れるフィン人の血を誇りに思うのは当然ですから。私はこれら幾千もの人々の自負の念を喜ばしく、また光栄に思います。私は彼らが誠実さや正義にたいし、どれほど忠実であるか知っています」とフックが発言を結び、会場は割れんばかりの拍手に包まれ、もはやフィンランドの祝祭参加に異議を唱えることは事実上不可能な雰囲気になっていた。そこで暗黙になされた了解とは、植民地建設に

真摯に貢献したフィン人入植者たちは、三百年後もまた、そのいにしえの名を負うフィンランド共和国として、合衆国にたいし変わらぬ真摯な態度を貫き通しているという〈血統証明〉にほかならなかったのだ。

フックは議長に、合同決議一三五号に添付する特別所見「アメリカ植民地史におけるフィン人^⑧」の提出許可をもとめ、認可された。ホルムズは壇上から引き下がり、あとに続く発言者はそろって、フィンランドに好意的な発言をし、そのたびに議場から拍手がわき起こった。最後にマクレイノルズが反対の意見はないようだと言長ウォレンに告げると、合衆国下院は採決を行い、法案は可決された。

すでに全会一致で法案を決議していた連邦議会上院とあわせ、一九三八年八月二五日付けで合同決議一三五号は成立し、ここにフィンランド共和国はスウェーデンとともに合衆国の公式招待のもとで、デラウェア河流域三百周年記念祭に参加することになった。

一九三六年六月五日に採決された「アメリカ合衆国政府と合衆国民のデラウェア河流域における最初の永住入植三百周年記念式典その他において、スウェーデン政府及びその賓客の参加を招待する決議案」と題する公的決議を修正する。

アメリカ合衆国の上院及び下院の合同決議により、第七四期連邦議会公的決議第一〇二号一項は、以下の語のように修正される。「スウェーデン政府」の直後と「及び」の直前に、「」と「フィンランド政府」を挿入する。また、「スウェーデン」の直後と「植民者」の直前に、「及びフィン人の」を挿入する。

同二項は、以下の語のように修正される。「スウェーデン政府」の直後と「及び」の直前に、「フィンランド政府」を挿入する^⑨。

7 結論

しかし、われわれが最大の謎につつまれてしまふのは、まさにこの議決の瞬間であろう。決議によって祝祭の予算が増額されたわけではない。一七世紀世界の〈歴史的事実〉が議会で認定されたわけでもない。スウェーデン側とフィンランド側は鋭く対立したが、ネイションどうしの利害や思惑に第三者的な調停が与えられたわけでも、何らかの政治的な判断が下されたわけでもない。さらに、当時アメリカ社会のなかで人種論的に微妙な位置におかれていた〈アメリカのフィン人〉を解放するわけでも、かれらのアイデンティティ・ポリティクスを礎となるわけでもない。ほんとうに合同決議一三五号で決められたこと

は、二・三の言葉を挿入したこと以外の何ものでもないのだ。だがしかし、〈アメリカのフィン人〉にとってこれほど待ち望まれた法案も他にない。

この一連のやりとりはまさに、〈国民史〉というフィクションの活性化の手順、この創作物が現実の経験を構成する方法を再現している。〈国民史〉というフィクションの発する効力は、つねに〈他者〉へ「記入／登記する」という問題と関わらざるを得ない。〈国民史〉が現実に効力を発揮するには、そこに関与する人びとあるいは国民の構成員のあいだで何らかの事実が周知に至ることだけでは不十分なのだ。〈国民史〉というフィクションがたんに（数の大小にかかわらず）信奉者のあいだに存在しているだけの状態と、その存在が〈他者〉あるいは〈権力〉の懷に適切に記入／登記された状態との相違は、表面的にはいくつかの言葉が共有されているか否か程度にすぎない。しかし、それはある種の宗教的な秘蹟と同じく、この相違が最終的に帰結する差異は決定的に大きい。ちょうどかかつていくつかのキリスト教会において、洗礼の秘蹟を施される前に死亡した

嬰兒が、キリスト者の共同体に正式登記されていなかった理由で、聖別された墓所への埋葬を許されなかったように、〈他者〉に適切に登記されない〈国民史〉は記念碑の下に埋蔵されることなく、歴史の辺獄をさまよひ、あるいはベンヤミンが「歴史哲学テーゼ」で詩的に表現したように、知ることのなかった姉たちのひとりとなり、沈黙のこだまのなかのひとつの声にならざるを得ないのだ。

フィンランドが国民国家として祝祭に参加する妥当性は、歴史的にはスウェーデン的な物語の枠組みに求められ、そして国民としての枠組みじたいは、アメリカ合衆国の歴史認識枠から規定され承認されることになった。この合同決議によって、〈アメリカのフィン人〉は、アメリカの国民史なかで、もっとも古い歴史をもつ「栄光ある国民」としての証明書を、フィンランド共和国は、その独立国家としての若さにかかわらず、歴史ある国民としての国家間認知を手に入れる大きな収穫を得たのである。

- (1) "Addresses of Dr. Rudolf Holsti," Emil Hurja Papers (EHP), Box 136, Franklin Delano Roosevelt Library (FDR Lib.), Hyde Park, New York.
- (2) 最ふちひさひなハ新米ユリノ文種ヲ著セシメ Melvin G. Holl. *The Wizard of Washington: Emil Hurja, Franklin Roosevelt and the Birth of Public Opinion Polling*. New York: Palgrave, 2002.
- (3) 以上の記載は FDR Lib. のフット・ドキュメントに関する収蔵資料をよりに作成。
- (4) Thomas Campanius Holm (ca. 1670-1702). *A Short Description of the Province of New Sweden, Now Called by the English Pennsylvania, in America*. translated from the Swedish 'Kort Bekräftning om Provincken Nya Sverige uti America, som nu fortjuten af de Engelske kallas Pennsylvania' for the Historical Society of Pennsylvania, with notes, by Peter S. Du Ponceau (n. p.: n. d., 1834), p. 81.
- (5) "Memorandum from the Division of Maps," Dec. 13, 1933, EHP Box 138, FDR Lib.
- (6) Peter Stebbins Craig. *The 1963 Census of the Swedes on the Delaware: Family Histories of the Swedish Lutheran Church Members Residing in Pennsylvania, Delaware, West New Jersey & Cecil County, Md., 1638-1693* (Winter Park: SAG Publications, 1993), p. 8.
- (7) Eero K. Djert, "Finn's Early Pioneers," in *Rainwaia* (June 10, 1938), microfilm stored at Immigration History Research Center (IHRC), University of Minnesota, Minneapolis, Minnesota.
- (8) *Official Program: Finnish Tercentenary Day, 300th Anniversary*

- (9) Robert H. Jackson, "Address of Acceptance of Monument Presented by the People of the Republic of Finland," Chester, Pennsylvania (June 29, 1938), EHP Box 135, FDR Lib.
- (10) この神話は「明白なる宿命」の主要な推進論者のひとり「ジョン・L・オサリヴァンが一八三九年に発表した「未来の偉大な国家」に如実に表れている。「どこまでも広がる限界なき未来とは、アメリカが偉大さを勝ちえた時代のことであろう。未来とらう壮大なる時間と空間の領域のなかで、数ある国家のうちでアメリカのみが、神聖なる原理の優越性を人類に明示せよと運命づけられ、至高の高み——〈聖なるもの〉にして〈真なるもの〉——を崇拜するために捧げられる。『もとも高貴なる聖堂を地上に建てたことを宿命とされたのだ。その聖堂の床敷きは全世界の半分の大地となり、その天井は星をちりばめた蒼穹の天界となり、その会衆は多くの共和国が集うひとつのユニオンとなる』。そこには幾百万もの幸福な人びとが寄り添い、地上に平伏すべき主人はなぐ、平等とらう神の定めたる自然の道徳の法則が支配するものとせよ。』 John L. O'Sullivan, "The Great Nation of Futurity," in Thomas G. Paterson, ed., *Major Problems in American Foreign Policy: Documents and Essays*, 2 vols. (Lexington, Mass: Heath, 1989), vol. 1, p. 202.
- (11) レジナート・ホームマンは「政治思想の分野において一八四〇年代までにブングロサクソニズムの意味が、共和国各制度の発展を史的に理解するための研究視点から、自己統治の能力を生

来的に備えた唯一の人種としてマングロサクソン人の優越性を誇示する本質主義的な定義へ変化していったことを論じている。Reginald Horsman, *Race and Manifest Destiny: the Origins of American Racial Anglo-Saxonism*, (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1981), pp. 62-81.

(25) John Saari, *The Meaning of the Delaware Tercentenary Celebration to Finnish Americans* (n. p., 1938, originally an address delivered May 15th, 1938 at Maynard, Mass.).

(26) "Address by Doctor E. Rudolf W. Holsti, Finnish Minister of Foreign Affairs," EHP Box136, FDR Lib.

(27) Raymond W. Wargelin, "Salomon Ilmonen, Early Finnish-American Historian" in *Sirttolaisuus/Migration* (Turku: Siirtolaisinstituutti), 1987 no.: 3-3-8.

(28) Public Resolution, no. 102, 74th Congress (H. J. Res. 499).

(29) "Delawaren Suomalaisen Muisto 300, 1641-1941, New York, Syskaun 29 p., 1936," Salomon Ilmonen Papers, IHRC.

(30) Melvin G. Hollt, "1938 Delaware Tercentenary: Establishing a Finnish Presence at the 300th Anniversary Celebration" in Aavo Kostianen ed., *Finnish Identity in America* (Turku: Institute of History, General History, University of Turku, 1990), p. 33.

(31) これまで、デラウェア三百周年記念祭に関する先行研究では、かなり以前から準備を進めてきたスウェード系アメリカ人になりし、フィン系アメリカ人の祝祭参加への準備は、どんなに早くても一九三六年始めから着手されはじめたと考えられていた。その結果たった二年でフィンランドがデラウェアの祝祭に参加できたのは、「フィンランド本国のナショナルイズム運動に呼応

した、アメリカ国内のフィン人のエスニック・アイデンティティ形成のための強引な祝祭参加運動の結果」といういさか強引な説明がなされてきた。しかし、今回筆者が、エミル・E・フレイの書簡を調査した結果、(アメリカのフィン人)が計画するのは別に、一九三〇年代はじめ、遅くとも一九三三年までにはフィンランド本国から内密にメンシルヴァニア州とのみ祝祭行事を行う計画が綿密にたてられていたことが判明した。メンシルヴァニア州知事、メンシルヴァニア州選出の議会議員とフィン系アメリカ人との親密さの原点には、エミル・E・フレイが一九三七年よりもずっと以前から築きあげていた個人的な関係と、フィンランド政府の根回しがあったと考えられる。

(32) "Letter of John Saari to Emil Hurja, Apr. 27, 1937," EHP Box 138, FDR Lib.

(33) Cited from Mr. Allen of Pennsylvania, "First Permanent Settlement in Delaware River Valley" (Report to accompany S. J. Res. 135, 75th Congress 1st Session, Report no. 1391).

(34) Ibid.

(35) Ibid.

(36) Ibid.

(37) フィン系アメリカ人の議会工作とあわせて、スウェード系アメリカ人の側から、デラウェア州知事や、新聞・定期出版物などの出版元に圧力がかかっていたようである。たとえば、ジョン・サリは以下のような手紙を書いている。「フィンランドとフィン人にたいして、デラウェア河流域最初の入植三百周年記念祭への参加要請をしないように圧力を加えることは、入植に際しフィン人たちが担った、役割と歴史とを無視するばかりか、フィン人とフィンランドへの甚だしい差別待遇である」と

- わたしは書きませぬ。そのちやうどは、毎朝どはなごにヤウ、
 フン人を離れごじらぬやうに思ひてなすませぬ。」(“Letter
 of John Saari to Ora E. Gates, Secretary of Emil E. Hurja, May
 17, 1937”, EHP Box 138, FDR Lib.)
- (25) “Three-Hundredth Anniversary of First Permanent Settle-
 ment in Delaware River Valley,” United States Congressional
 Record, August 21, 1937.
- (26) Ibid.
- (27) Ibid.
- (28) Ibid.
- (29) Ibid.
- (30) Max Engman, “The Tug of War over ‘Nya Sverige’ 1938”,
Swedish American Historical Quarterly 45, 1994: 84.
- (31) Ibid.: 80-81. この二列拳をめぐると四地域には、主にフィンマー
 クとの間に激しい領有権争いが続いでいた。ヌウェーデン王国
 が確定的にこれらの地域を領有するやうになつたのは、カール
 十世が対フィンマーク戦争に勝利するこゝで締結した一六五八年
 のロスキレ条約以後のことである。
- (32) Ibid.: 83.
- (33) “Letter of Emil Hurja to F. D. Roosevelt, April 6, 1938,” EHP
 Box 138, FDR Lib.
- (34) United States Congressional Record, *op. cit.*
- (35) Ibid.
- (36) フンランド共和国とアメリカ合衆国の戦争負債を扱つた包
 括的な研究として Benjamin D. Rhodes, “The Origins of
 Finnish-American Friendship, 1919-1941” in *Mid-America: An
 Historical Review* 54, no. 1, January 1972: 3-19 等を参照せよ。

次の文節を参照せよ。Leo Hamama, *Effects of the War on
 Economic and Social Life in Finland*, trans. by James T. Shot-
 well (New Haven: Yale University Press, 1933); Paul Einzig,
World Finance 1914-1935 (New York: The Macmillan Com-
 pany, 1935), pp. 327-332, and *World Finance 1939-1940*
 (New York: The Macmillan Company, 1940) pp. 191-196;
 James Goodwin Hodgson, ed., *Cancellation International War
 Debts* (New York: the H. W. Wilson Company, 1933); Wildon
 Lloyd, *The European War Debts and Their Settlement* (New
 York: Committee for the Consideration of Inter-Governmental
 Debts, 1934).

(37) この「戦争負債」という言葉は米国民の多くが「返債」返債の
 ある種の魔力を持ち、その返済履行は、一般の「負債」返済の
 場合よりも、高潔な、神話的な逸話を生みやすかつた。フィン
 ランドの負債返済に関する神話的伝説は、一九三九年十二月に
 勃発した「冬戦争」(第一次連日フィンランド戦争)時に、
 繰り返し強調されて合衆国の各メディアに引用され、フィンラ
 ンドに向けての大きな同情を集めた。ただし、そのあまりの
 「神話」の大きさに、米国民のフィンランドに対する評価を悪
 刺たように主張する研究者も登場してゐる。たゞそれ以外に
 論を参照せよ。Thomas A. Bailey, *The Man in the Street: The
 Impact of the American Public Opinion on Foreign Policy*
 (New York: The Macmillan Company, 1948), pp. 234-237.

(38) 通称キヤンパン・レポートと呼ばれた合衆国世論調査の結果は、
 「あなたのおへんも好きなヨーロッパの国家は何ですか」
 という問いに対する回答は「フィンランド」は常に上位五
 位以内にフィンランドであった。冬戦争が始つた一九三九年の

